

玉越 高木 宏動 社長インタビュー



高木 宏動
1974年7月生まれ。愛知県瀬戸市出身。92年8月、Judson High School卒業（アメリカ合衆国アリゾナ州）。97年3月、玉越入社。2010年4月、取締役副社長就任。14年5月から現職。

——どんな会社ですか？

高木 私は二代目社長で二年前に就任したのですが、代表取締役になったのは今年です。会社の創業は一九八三年。元々、瀬戸物の陶磁器販売を業としていましたが、経営というよりは親族を養うために働いていました。その中で遊技業にも参画するようになり、九年ほど修業して参入。業界では後発です。バブル景気の終わりで経済的な苦労はなかったようですが、当時はお客さん対応で大変だった

たそうです。

——厳しい業界と聞きますが、勝ち残りの決め手は？

高木 この業界に限りませんが、おごらず、常に努力することです。繁盛店がその後閉店したり廃業するなど、二〇〜三〇年の間にどんな業界の景色は変わってきました。

わが社は平均的ですが、一二年前から大学新卒採用を始め、当初は外部研修、のちに会社の中でのマネジャー研修などを行っています。定着率は業界の

勝ち負けだけのイメージを払拭し
様々なエンターテインメントの提供で
お客様に楽しんでもらいたい

平均よりはいいと思います。社風がそれなりに良いからかもしれません。温かいとかアットホームと言われます。

最近では人事考課の仕組みに気を使っています。社長になってからですが、評価調整会議では、一人の所属長で判断せず、全幹部参加で業績や人物の評価をし、幹部が状況や理由などを話せないとならない仕組みです。部下を見ていないと話せないの

で幹部が評価されることにもなります。最終的には私がジャッジしますが、偏らない仕組みだと社会保険労務士にも評価されています。

無難それには、人とうかがわっていくか、が大切です。今は時間が取り難くなっています

が、レクリエーションなどで接するようになっています。こういったところが風通しの良さにつながっているかもしれません。

売り上げは全国一〇〇位内です。

業界の中では中堅。財務内容は出店すると投資が重なり、バランスが崩れますが、頑張っている方だといわれます。

——社員数ではどうですか？

高木 地域の植樹などやペットボトルのキャップ回収は従来から続けていますが、最近是小規模でやっていた少年野球教室に坂東英二さんが参加してくれまして形になってきています。

子供のころの夢はどのように育つか分からないので、そういう機会があればそのきっかけになればいいと思っています。母にもそういう経験があったようで、夢というのは無限に育っていく、と言われ、機会提供できる会社にならないと意味がない、と肝に銘じ続けています。

——業界のイメージアップについては？

高木 勝ち負けによって決まる、という業界イメージがありますが、そのイメージを変えて

なあと考えるようなパート並みの品ぞろえを進めています。一時はカラオケ店併設もありましたが、今は九五%がパチンコ・パチスロです。

私は幸い親の了解が得られ高校、大学と米国留学できたので、人種の違い、表現の仕方、文化など日本では分からない勉強もできて、おかげで比較する目が養われました。

最近も海外視察に行きますがいろんなエンターテインメント施設を見て回っています。米国西海岸やスタンフォード大学に留学しているスタッフもいますので、競争が厳しいこの業界の状況を見据えながら、今後も対応していきたいと思っています。

いけるか、ですね。若い従業員がそのイメージを変えられるか、勝ち負けを超える価値があるのではないか、を追求してもらいたい。法律上の規定は変えられないので、業界自体でも対応することですが、いろんな人と知恵を出していくことが必要でしょう。

——今後進めたいことは？

高木 一つはさきほどの業界の健全化をもっとアピールしていくことです。そしてもう一つは、若い人たちの思いをもっと外に出していくことです。社内新聞で意見発表の場を設けたり、レクリエーション大会を開催し、様々な人と顔を合わせられる機会をつくり、出会いの支援をしています。